

引退者コミュニティの現状  
 アメリカ、ワシントン州マーサーアイランドにおける  
 カバネントショアーズの人々と生活

中 島 友 子

The State of the Covenant Shores Retirement Community  
 The Life and People of Covenant Shores on Mercer Island, Washington, USA

Tomoko NAKASHIMA

Retirement communities are not yet common in Japan. The purpose of this paper is to introduce the Covenant Shores Retirement Community on Mercer Island in Washington, USA and the lives of people living in it, and to consider what Japanese can learn from them.

I stayed with an 82-year-old woman, A, in Covenant Shores for 8 days from March 15<sup>th</sup> to 23<sup>rd</sup>, 2007. I observed the lives and people there. Most of the people I met were over 80 years old. However, they were very independent and enjoyed their own lives. Many were peer volunteers. Japanese can learn to be unique, the importance of retaining one's past way of life and that the elderly can help one another.

Key Words : Retirement communities, Independence, Living, Uniqueness, Peer volunteers  
 引退者コミュニティ、自立、生活、個性、ピアボランティア

はじめに

アメリカ、ワシントン州、マーサーアイランドに引退した人々のためのコミュニティであるカバネントショアーズがある。カバネントショアーズは、アメリカ全土にある15のカバネントコミュニティーの一つである。NPOでキリスト教に基づいて組織、運営されており、27年の歴史を持つ。東京ドームより広い12エーカーの広大な敷地を有するいわゆる介護付き有料老人ホームである。自立した人々のための250の住居、(Residential Apartment) 43のナーシングホーム(Nursing Home) 32のアシステッドリビング(Assisted Living)のための住居、記憶を失っている人々(Memory Loss)いわゆる認知症の人々のための

13の住居があり、計350名が終の棲家として住んでいる。

引退者のためのコミュニティは、アメリカでもあまり知られていないが、日本ではなおさらである。この度、筆者は39年来のアメリカ人の知人が住む引退者のコミュニティで生活する機会を得ることができた。2007年3月15日から3月23日までの8日間、ショアーズで一人暮らしの82歳の白人女性Aと共に暮らし、コミュニティの生活取材した。また、その期間、コミュニティ及び、シアトルや近郊に住む高齢者に出会う機会にも恵まれた。本稿において、日本では知られていないアメリカの引退者コミュニティに住む高齢者の生活、素顔を紹介する。まず初めに共に生活した、Aの背景、Aのショアーズにおける生活、そしてショアーズ

受付 平成 19 年 4 月 25 日 , 受理 平成 19 年 5 月 1 日  
 近畿福祉大学 〒 679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡 1966-5

ズで出会った高齢者の素顔と生活を紹介します。次に、カバネントショアーズから学ぶ課題、最後に、国際理解教育の視点から示唆しうることを述べる。また、垣間見える文化も記し、資料も付記する。

25年前、筆者はシアトル市内の高齢者施設を訪問した。個室が多く、入居者は部屋に自分の家具を持ち込み自分の「ホーム」を作っていた。また内部ではいろいろな活動や催しが行われており、当時の日本の様子とは異なり驚いた。当時は、日本では親の介護は長男の嫁の肩にかかっており、施設に入る人は少なく入居者に対しても気の毒な恵まれない高齢者との見方が大半であったと思われる。個人のプライバシーの少ない施設が多かった。25年前、シアトルで見学した高齢者の施設のありようが今日本の施設に見られる。国の事情は異なるが、本稿から日本の高齢者のための未来の多様な施設の一つの方向が見えるのではないかと思われる。

尚、滞在中同じくワシントン州レッドモンドにある引退者のためのコミュニティ、エメラルドハイツも見学できたことは幸いであった。概要はカバネントショアーズとともに、次回紹介する。

## 1. 入居者の素顔と生活

### (1) Aの背景

Aは、82歳の白人女性で元看護師である。結婚を機に退職し、以後専業主婦。敬虔なキリスト教信者で教会の行事に多く参加し、教会活動を通して友人が多い。

シアトル郊外の一軒家に夫、子ども4人と暮らしていたが、子どもが独立した後、家を売り、シアトルのダウンタウンのマンションに引っ越す。快適な生活であったが、4年前に、夫を亡くし、カバネントショアーズに移る。夫の生存中に相談して決定。引越しにあたり、食器、家具の多くは、子どもたち、友人に譲る。良い食器も譲ったので「朝食用の食器で生活している。」

とユーモアたっぷりに話す。以前所有していた重厚な食器とは異なるということであろう。とはいっても、結婚当初購入した絵画、亡母からの机などは手元に置く。数少なくなっただけはいるが、古いティポットやカップ、家具など慣れ親しんだ愛用の品と共に暮らしている。

自立した人々のアパートに住む(Residential Apartment)。ベッドルームが2つあり、日本であれば夫婦と子ども一人(あるいは二人)が住めるマンションであろう。台所には生ごみ処理機(ディスポーザー:生ごみを攪拌し下水に流す装置)、食器洗浄機、冷蔵庫、電子レンジ、オーブンが備えられている。洗濯は、共同の全自動洗濯機(乾燥機能付)を使用。雨の多いマーサーアイランドやシアトルでは外に洗濯物を干す習慣はない。自立した生活を送る。車で約30~50分のところに娘が、5分くらいのところに次男が住む。娘からはしばしば電話が入る。Aは「年がいくと母娘の関係が逆転する」と語る。いずれも同じである。82歳であるが教会活動、PEO(後述)活動にと多忙である。

外出には車を使用。トヨタのレクサスに乗っているが傷が多い。修理には多額の費用がかかる上、同じことの繰り返しとの娘の忠告に従いそのままにしている。コミュニティから買い物バスが出ているが、自分の車で自由に出かけることを好む。ダウンタウンは、駐車場不足のため、バスを利用する方が良いのだが車の便利さにはかなわないようである。外出すると時折、道が怪しくなり、回り道をして予定の時間より長くなる。少し余分にドライブを楽しんでいるという程度であるが。

音楽愛好家でコミュニティからの演奏会の案内には必ず申し込んでいる。新聞を見てオペラのチケットを手に入れたりもしている。イチローが話題になると野球観戦にも申し込んでいた。コミュニティのバスで連れて行ってもらう予定である。



カバネントショアーズ



Aのアパート

引退者コミュニティの現状  
アメリカ、ワシントン州マーサーアイランドにおけるカバネントショアーズの人々と生活



Aの居間

身内のことなどさまざまな悩みはあるだろうが、経済的にも健康にも恵まれ、豊かな老後を過ごしているといえよう。噂話は好まない性格で他の居住者のプライバシーを尊重し、彼らについて話すことはなかった。ただ、「いろいろな人がいるわ。どこに住んでも同じ。」という表現をしていた。

(2) Aのカバネントショアーズにおける生活

3月15日(木)～3月23日(金)

3月15日(木)

毎朝、玄関のカードを表に向ける。元気で、朝を迎えたという証拠になる。確認されると、裏になっている。

11時より始まるPEOの例会のための準備をする。PEOとはPhilanthropy Education Organizationの略語で、Philanthropyは博愛、慈善を意味する。PEOは女学生に学費を援助する団体である。Aの孫も、その援助を得て大学に進学した。12名の女性の出席があった。最高齢者は98歳。車を運転しての参加である。もちよりの昼食会で、主菜の七面鳥入りのサラダ、デザートのエンゼルケーキ(以上手製)クラッカー類多種、およびチョコレートボールなどが並び、98歳の女性はエンゼルケーキ(白いシフォンケーキ 中は緑色)を持参した。少し耳が遠いが元気である。エンゼルケーキを取り分けてくれた。祈りから始まり、昼食、その後想像ゲームと続く。一人が架空のストーリーを作り次の人がそれを受けて話を続けていく。ところが途中から本当の自分の経験談となってしまった。いつもはスピーカーを決めているが、今回はなかったのがこのようにしたということである。その後、持参したベアトリクス・ポターについての新聞記事を紹介していた。そしてPEOの会議となり筆者は席をはずした。

夕食

別棟の食堂へ行く。入り口で共に食事をする約束しているか、そうでなければ合い席でもかまわないかと案内係りが尋ねる。約束をしていなかったので案内係



食堂

りに任せる。隣席は元教員の夫婦であった。初めて会った人々とも会話を楽しむ。予め電話で連絡を取り仲良い同士で夕食をとることが多いようである。クロスがかけられ、布ナプキンが置かれ、ホテルのようであった。(メニュー参照)

3月16日(金)

現在住んでいる建物の世話係りを一年間勤めたが、今週で終了するため引継ぎの書類の整理をする。

友人の誕生日のプレゼント購入のため車で園芸店へ行く。園芸店はとにかく広い。緑に囲まれて昼食。植木鉢を購入し、夫を無くしたばかりの一人住まいの友人に届ける。

夕方、Aは疲れて昼寝をしたため、食堂での夕食の時間が過ぎてしまう。夕食代は費用に含まれているので、食堂を利用する方が経済的だと思うのだが、Aは全く気にしていない。夕食は冷凍食品のチキンロール(春巻き)とハンバーグであった。Aは顔をしかめて残す。

夜、シアトル交響楽団の第一チェロリストの演奏会へ、娘Joの運転で、コミュニティ内の友人、B(B参照)孫のJsと出かける。娘はイギリスに数年住んだ後、イギリス人の夫と帰国し経理の仕事をしている。パートで働いていたが、子どもの大学の授業料のため、最近、常勤となる。持ち家だが、30年のローンということである。孫のJsは看護師。シアトルの病院に勤務している。3ヶ月の休みを利用し友人の住むフィンランドへ行っていたが一時帰国中である。5日後にはフィンランドへ帰る予定。看護師は不足しており、休みにも恵まれているとのことである。演奏終了後、アイスクリーム店へ行く。帰りは10時過ぎ。Bは足元がふらつくため手をつなぐ。

3月17日(土)

朝食をかねてベルビューのモールへ行く。コーヒー

を注文するとSサイズであっても日本の2倍の大きさである。駐車料は無料。携帯電話の使用は、日本より少なく思われるが、携帯の使用のため交通事故が増えている。日本で運転中の使用は違法だということアメリカにも取り入れるべきだと言う人が多い。Aのジーンズ購入後、食料品を買いにマーケットへ行く。買い物済ませた後、財布がないことに気付く。カードも入っており、心配するが、帰宅後、買い物袋の中から出てきた。やれやれであった。Aは忘れ物、忘れごとが多い。

24時間、介護つきの別棟、ヘルスケアーに住むパーキンソン病を患う友人Cを尋ねる。(C参照)

夕食は食堂でとる。必ずしも旧知の人ばかりではなかったが、グランドキャニオンへの旅行について、出身地別の会の運営方向について、ヨガ教室について、今晚の映画についてなど話が弾む。

6時45分よりホールにて映画鑑賞。引退者コミュニティに住む老婦人と町の青年との交流を描く。

3月18日(日)

教会へ礼拝に行く。礼拝後、教会の友人であるMの1980年のベンツに乗り、シアトル交響楽団演奏会へ行く。Mは80代後半である。最近アルツハイマーの夫を亡くし、一人で住んでいる。演奏会場では、ウォーカー使用の高齢者が多い。また、高齢の母と娘の姿も多い。館内での昼食時、合い席となった80代の母と娘との会話が弾む。演奏会終了後、Mのお気に入りの食料品店で買い物をする。

6時30分から7時30分まで ホールにてバイブル教室。聖書に関する講座が多く開かれている。終了後、互いを紹介しあい会話を楽しむ。教会へ行けない人のため礼拝もあり、近隣の教会へ行くためのバスも出ている。

3月19日(月)

9時よりコミュニティ全体の運営委員会がホールで開かれる。壇上には国旗がある。出席者は約115名。経営者側の出席も有り、正式な会議である。各委員会代表からの報告、提案があった。集会はいつも冗談から始まる。Sincere, Short, Seatedと高校時代言われた3Sを導入に使っていた。主な内容は次の通り。

アジェンダ

1. 祈りで始まる。
2. 議事録の承認。予算報告。
3. 入居者の報告。今回は新しい入居者はなし。
4. コミュニティーの各部からの報告。主なものを記す。

- ・建物の管理について ゲストルームを改修中。
- ・建物の修理、ペンキ塗りが必要となっている。
- ・ワシントン湖に面しているため多くのガチョウがいる。その鳴き声や糞の問題。
- ・自然の花を植えるように、人口の花は遠慮して欲しいと要請。
- ・食事の内容について、コックへの要望。サラダバーでのスプーンの数について。杖置き場の設置を要請。
- ・コブ(販売所)からは新しいカードや品物が入っているとお知らせ。入居者の作品を販売できるよう協力をお願い。
- ・コーヒーギャラリー(コーヒーやクッキーを楽しむ、新聞や雑誌が読める)の新聞を持って帰らぬように。(支払いは無人になっている。)小銭がなくなることがあるが、両替は遠慮して欲しい。
- ・食堂の横にあるガラスケースの展示物の協力をお願い。現在は1880年から1890年代の絵葉書を展示中。次回は野球をテーマにしたいので野球帽、かばんなどあれば協力を。孫にも頼んで欲しい。
- ・図書係りからは新書の案内と本の返却について。
- ・プログラム係よりシアトル交響楽団演奏会への参加を募る。今年は9から6シリーズへ変更。美術コース、水彩画コースの案内。5月より8回で30ドル15人募集。今日は19時30分より歴史のクラス有り、受講料を払っている人のみ対象。
- ・キリスト教宣教師の講演紹介。食事係も協力してどのように私たちが食べ物を得ているのか分かるように言葉を置くようにしてはどうかとの提案有り。
- ・木工部クラブより鋸の購入を報告、鋸を使用した作品の発表。
- ・オーディオ・ビデオ委員会 コミュニティ用TVプログラム予算の6800ドルの承認を。22チャンネルでは毎日の予定、活動、委員会、誕生日、結婚記念日、偲ぶ会(お別れ会)等のお知らせが放送されている。
- ・3月の活動としていろいろあるが、その一つにピーパッチのお知らせ(pea patch news:何でも植えて楽しめる個人の花壇、小さな畑)があった。使用したい人は申し込むように。土についても説明。想像以上に多くの人が花や植木の手

引退者コミュニティの現状  
アメリカ、ワシントン州マーサーアイランドにおけるカバネントショアーズの人々と生活

入れを行い自然と楽しんでいる。

・ 次回は4月16日

午後、Aの娘Joと孫Jcとスノウクアルミ滝を見に行く。シアトルの名前はネイティブアメリカンの酋長の名前であり、いたるところネイティブアメリカンの名前が多い。遅い昼食、ハンバーグを食べるがこれまた大きい。

帰宅後、夕食は家にて、スープ、クラッカーなど軽いもので終える。

3月20日(火)

朝、銀行と、ユダヤ人の利用の多いスーパーマーケットに出かける。マーサーアイランドには裕福なユダヤ人が多い。Aは3年間マーサーアイランドに住んでいるが、このスーパーマーケットでの買い物は初めてであった。ユダヤ人用の食材が一部売られていた。

午後、筆者がコミュニティの責任者であるアラカキ氏に案内してもらう間、Aは家事、読書。その後Cに会いに行く。

夕方、筆者は歯医者であるドクターH氏夫妻、ドクターHam氏夫妻、Ham氏の前妻の子どもKとA、そしてKの娘であるAnとの夕食のため外出。4家族のうち2家族は離婚、1家族は調停中とのこと。(資料3参照)日本人経営のSUSHI店へ行く。多くのアメリカ人で大変繁盛していた。

その間、Aは家事、読書、電話、支払いのチェックをする。コンピューターと格闘。Eメールが、娘から送られているらしいのだが。

3月21日(水)

朝散歩。日々、歩くことを心がけている。桜、水仙、チューリップ、パンジー、沈丁花が美しい。住人による花の手入れが行き届いている。80代と思しき女性が休憩をとりながら、草を引き、花を植えていた。ウォーカーで散歩する姿も多い。

昼前、引退者コミュニティ、エメラルドハイツに住む友人Jを尋ねる。Jと共に昼食をとる。プリペイドカードを使用。

昼食は、サラダバー、メイン(3種類より選択)飲み物(数種類から選択)、デザート(3種類より選択)であった。80歳過ぎの女性に出される食事としては、日本では考えられないほど量が多い。Aは入居をショアーズにするか、エメラルドハイツにするか迷ったが、交通の便を考慮しショアーズを選択したと語る。Jは非婚。Jにエメラルドハイツを案内してもらう。最後にJの部屋に行ったがモダンな家具がそろえてあり、

とても80代の女性の部屋とは思えなかった。ベッドルームは一つ。机の上には書類が多い。Jは販売の仕事に携わっており、現在も現役ということである。

入居者はそれぞれ、自分のホームを作っている。介護が必要な人々の階を歩くが、全く臭いがなく、清潔そのものであった。

帰りは回り道が多く時間がかかる。途中、学校が統合のため取り壊されているのが目に付く。遠くの学校へ通わねばならず地元の人は快く思っていない。

夕食は食堂へ行く。会話を楽しんでの食事。7時より「許し」について宣教師による講演。8時半より、Fの家でグランドキャニオンの武勇伝を聞き、グランドキャニオンのDVDを鑑賞する。(F参照)

3月22日(木)

朝、散歩

シアトルのダウントウンで昼食。チップは食事代の15%を支払う。15%が平均とのことである。

駐車場でホームレスと思しき人が「今晚寝る場所の確保のためどうしても16ドル必要、妻、14歳の娘がいる。」と無心に来る。少し離れた所にもホームレスの姿があった。帰途、Aは炊き出しをしているサルベーションアーミーの建物を教えてくれた。

帰宅後、同じ建物に住むOを訪問(O参照)。その後Mにキルトを見せてもらう。(M参照)

夕食は、次男一家とともに、外食。ピザを食べる。久しぶりの出会いである。

夜 同じ建物の住人Lを訪問。(L参照)

3月23日(金)

朝散歩

車で筆者を空港まで見送る。

以上、Aの1週間であった。筆者が滞在したため、いつもとは若干異なった忙しい生活になったであろうと思われるが、引退者のコミュニティにおける、自立している高齢者の生活の一例である。コミュニティに移る以前とあまり変らない生活している。Aは薬のために、朝、早く起きることが難しい。朝、ぼんやりしていることが多いが、本人は、そのことを自覚し、薬をたまに、控えたりしている。物忘れが時々あるが、生活に支障はない。以前からの友人や、コミュニティ内での友人から電話がよく入る。ほどよい距離を保ちながら、付き合いを大切に、自立した生活をおくっている。

(3) 出会った入居者の素顔と生活

1) ヘルスケアでの生活

C 女性 83歳

1998年からパーキンソン病を患う。初めは、Aと同じように一人で自立した生活をしていたが、今はヘルスケアに住む。元看護師。Aとは看護学校の同級生。亡夫は空軍に勤務。休みが多かったため、夫とトレイラーでアメリカ中を旅行したと語る。絵を描くのが得意でコブ(スカーフ等の装飾品、小物、カードなどを売っているところ。コミュニティに住む人々の作品、たとえばカード、手編みの帽子、セーターなども販売している)でCの書いたカードが販売されている。売上金は寄付。スケッチブックを見せてもらうと水仙が描かれていた。最近では自画像を主に描く。モデルに長時間座ってもらわねばならないが、自画像ならその必要はないからとのこと。車椅子での生活。部屋数は一つで狭い。

目の手術を受けたが糸が出てきており再入院予定。車椅子であるが他の人の世話をする。目の不自由な人のためにテーブルを作成する。明るく、前向きである。Aとは会うたび宗教の話となる。Aは敬虔なキリスト教信者であるが、Cはそうではない。仏教、ユダヤ教に関心を持っている。ピアボランティア。

2) 自立した人々のためのアパートでの生活

O 女性 98歳

この8月で99歳になる。Aと行くと大きなティーポットにお茶をお皿にお菓子を用意して待ってくれていた。とても98歳とは思えない。AやFのように一人で自立した生活をおくっている。ティーポットが大きく重いので手伝おうとしたがその必要はなかった。窓際に孫からのプレゼントの小鳥のおもちゃがある。何もしないのに何かの拍子でなき始める。本物の鳥と間違ふような鳴き声であった。その声と姿につられて、鳥が窓のところへ来たと楽しそうに話してくれた。

自立した生活をしている。部屋ではウォーカー無しに自由に動けるが外出時にはウォーカーを使用。病気の友人を見舞ったり、手助けの必要な友人のところへ行ったりして手伝っているとのこと。ウォーカーに大きな花瓶を入れてアシステッドリビングの方へ行く姿があった。Oの存在は多くの人に力を与えている。ピアボランティア。

F 女性 85歳

75年間シカゴで生活するが、息子がシアトル在住のため、元、歯科医の夫と共にコミュニティで生活を始めた。夫の死後、一人で暮らす。道路を隔ててAの向かい側の建物に住む。部屋の大きさはAと同じ。腰が曲がっているため、初めは、助けが必要かと思ったがそうではなく、毎朝5時半に置き、散歩を楽しむ。腰が曲がったのは、夫の看護のためらしい。Fには結構無理をいっていたと他の人から聞く。Fは穏やかな人柄であるが意志が強く、独立心に富む。速くは歩けないが、ヘルスケアに住むパーキンソン病のCが食堂へ行くのを手伝うなどしている。コブのボランティアとして販売を手伝っている。

Fは一人でグランドキャニオンでの7時間にわたるロバの旅にでかけ、帰ってきたばかりだった。地学研究会の講座に一人で参加。武勇伝を語り、購入したグランドキャニオンのロバの旅のDVDを見せてくれた。以下、Fの武勇伝である。

ラスベガス空港からグランドキャニオン行きの空港へ行かねばならず、尋ねるが、案内が間違っており、逆の方向へ歩いてしまう。しかもタクシーで違った空港へ行ってしまった。間違いに気づき引き返そうとしたが現金のないことに気づく。ラスベガスではクレジットカードは使用できず、どうする術もなかった。タクシーのドライバーに「帰ったらお金を送るのでどうか信用してほしい」と頼んだところ、ドライバーが空港の人と話をし解決し、何とか飛行機に間に合ったということであった。講義を受けたが、興味深いのもあればそうでもなかったと述べる。グランドキャニオンでのロバの旅については初めから予約していたわけではなく、キャンセル待ちということで、ようやく機会を得たと語った。かくして、7時間のロバの旅の始まりとなった次第である。85歳の腰の曲がった女性が、ロバに乗り、グランドキャニオンの下まで行くという決断力、好奇心、精神力、行動力に驚きを禁じえない。

非常に独立心が強い。このクリスマスにはまた、一人旅を計画中。よく旅行をしている。昨年はNと旅行。「Nは本当にこれでいいのとか、いろいろ気持ちを確かめなくてもいいから良い旅行友達なのだけれど、一つだけ困ったのは、私はNほど早く歩けないということ。だから次回は一人で行くと思っている。一人旅は気楽で友達も作りやすい。」と語る。

コミュニティ内に、細々とした用事を頼める人がおり、DVDの操作を教えてもらったとのこと。操作に少し手間取ったが、何とか見ることができた。Aと筆者のために上映してくれたのだ。ジュースとポップコー

引退者コミュニティの現状  
アメリカ、ワシントン州マーサーアイランドにおけるカバネントショアーズの人々と生活

ンを出してくれた。週末には息子一家がたずねてくる予定。自分の家で食事をするのは大変だから、食堂へ行くつもりだと語る。尚、訪問者の夕食代は一人13ドルである。

後日出会うと、「ロバの旅から一週間たって足が痛くなってきた。」と不思議がっていた。Aが「また行けばいいじゃないの。」などと冗談を言っていた。筆者が帰る日の朝、無事に帰れるようにと電話が入った。85歳で腰が曲がり早く歩けないが、自立心が強く自然体で自分らしい生活をおくっている。ピアボランティア。

M 女性 85歳

Aと同じ建物に一人で住む。帰国する前に是非にと今創作中のキルトを見せてくれる。結婚後、キルト作りをはじめ。これまでも数多くのキルトをプレゼントしている。今回は大作である。出来上がったら写真を送ってくれるとのこと。キルトを作っているところを写真にとAが頼んでくれたが断られた。

B 女性 80代後半

少し歩き辛いので手をつなぐ。Aの音楽友達。終戦直後の日本へ行く。夫は軍人。マッカーサー元帥の演説を日本で聞く。戦後の混乱を、あれほどの多くの人を見たことはなかったと語った。子ども二人とも軍隊に入る。

R 女性 80代

非常に話題が豊富で話が途切れることがない。元医師の夫とともに住んでいたが夫は死去。その後、別棟に引越しすることを提案されるが夫とともに住んだ建物、眺めた景色から離れ難く、一人で住んでいる。亡母、祖母のテーブルを修理して大切に使っている。第二次世界大戦後進駐軍兵士の妻として来日。「日光、修禅寺湖、箱根の美しさは忘れられない。」と語る。日本の上流階級しか使うことのできない旅館に滞在。旅館でもてなしもよき思い出として心に残っている(金谷ホテル)。日本の旅館での宴会の写真や当時の国民学校の生徒の描いた絵を大切に保管している。日本の壺や骨董品を購入。サンフランシスコで売却を試みるが、骨董品店主よりあまりにも素晴らしいので手放さぬよう言われたとのこと。その壺はロサンゼルス在住の息子の手元にある。長く旅行会社に勤務した。今も仕事をしている。自分はイタリア人だと語った。コミュニティ内の友人がホスピスに移り、4日後に亡くなったことにショックをうけていた。

N 女性 80代

画家。多くの絵を廊下に飾っている。今も、描いている。

N 女性 80代

退職後、夫とニュージーランドまで自分達の船で旅をした。夫死亡後、一人で住む。

M夫妻 70代～80代

食堂で合い席となる。夫は裁判官。無口である。妻が話をしてくれる。もともとマーサーアイランドに住んでおり、マーサーアイランドから離れ難いのでここを選んだ。息子は二人だったが、一人は28歳で癌のため死去。もう一人の息子は、ロサンゼルスに在住。大きな家で多くの家具を所有していたが、引越しのため処分。家具、特に机(4つ)の処分に苦慮。ガレージセールは好まず。生活の規模を小さくするのは難しいと語る。夫は足を骨折。以来、あまり健康が優れず、食欲もなく、妻は心配している。

D夫妻 とともに80代

夫は、元高等学校の美術の教師。17年勤めた後、高等学校のカウンセラーとして30年勤務。妻は足が少し不自由で、杖をつく。Aとは面識がなかったにもかかわらず、PEOの集会の準備で忙しいAの代わりに、夫妻で、筆者を空港へ迎えに来てくれた。このような場合、Aは、お礼をDに支払い、Dは全額寄付するというシステムがある。

M夫妻 とともに80代

宣教師として戦後すぐ来日。東京、新潟、群馬の大学で努め、48年間日本に滞在する。14年前から妻とともにここに住む。娘は日本の小学校へ、中学と高校は日本でアメリカンスクールへ通い、その後、アメリカの大学に入学したとのこと。「戦後間もない日本はとても貧しかったが、帰る頃には日本人は私達よりもはるかに豊かになった。」と語る。日本語を話していたが、使わないので忘れていたとのことである。

T夫妻 とともに70代前半

元高校教師。娘は、日本の大学に1年留学経験有り。出会った人々の中で、一番若い。

3) コミュニティの中での結婚式

ショアーズで住人同士の結婚式も行われた。結婚前、手をつなぎ一緒に歩く姿は注目の的であった。皆わく



レセプションの案内

わくして二人を見守ったとのこと。結婚後、二人は夫のアパートで住む。上の写真はレセプションの案内である。お祝いは辞退、その代わりにその気持ちをアルツハイマー協会、アメリカ癌協会へと記されている。

## 2 カバネントショーアーズから学ぶ課題

### (1) 自立、個性、ピアボランティア

コミュニティの中で生活し、印象的だったのは、出会った人々それぞれが、自立心が強く、個性的であったということである。そして、多くの人が、他の人のために、できることをしようとしていたことである。

パーキンソン病でありながら、絵を楽しむCは、作品をコブで販売し、その売上金を寄付している。85歳で単身、グランキャニオンでの7時間にわたる口バの旅を楽しんだFは、コブで、ボランティア活動をしている。また、食事の介助等もしている。98歳ながら、一人で自立した生活をするOは、話し相手になり、用事を手伝っている。82歳のAは、教会活動を続けるかわら、PEO活動にも関わっている。

その他、目の不自由な人々のためにテープを作成する人々、木工技術を高め、コミュニティの生活に生かそうとする人々、コミュニティに住みながら仕事を続ける人々、何れも80代前半から90代後半の人々である。

自分の個性を大切に、その個性でもって、他の人の役に立とうとしている姿は印象的であった。ピアボランティアの姿を多く見聞きした。

来日したイギリス人やアメリカ人が、「日本の高齢者は元気でよく働くので驚く。」と話すのを聞く。筆者は兵庫県加古川市にある介護付有料老人ホームに住んでいた当時80代の童話作家で作詞家のYさんと懇意にし、訪問していたが、Yさんは施設内で、詩歌の教室を開くとともに、他の入居者への気遣いを欠かさなかった。また、90代の男性で大阪在住の詩人のSさんと文通をしていたが、亡くなるまで創作意欲は衰えることがなかった。このような例も多く、どのグループの人々に出会うかで意見は、異なるであろう。日本人だからアメリカ人だからと画一的な捉え方は控えるべきであろうが、コミュニティで出会った人々は、一般的に日本人よりも、「もう、歳だから」ではなく、自然体で、したいこと、できることに取り組んでいるように思われた。自立心の強さと、行動力、個性を生かし、他の人の役に立とうとする生き方には驚嘆を禁じえない。

いくつになっても、どんなに些細なことであっても、人のためになることが生きがいにつながるであろう。加古川にあるデイサービスの利用者である89歳のCさ

んは、「いつもありがとう、すまんな、というのにはうんざりしている。」と語る。多くの高齢者の本音である。高齢者はいつもしてもらう立場におかれることを望んではいない。高齢者だからと一括りにせず、高齢者だからこそ、これまで長年育んできた個性を、発揮し、活用できる環境作りが、必要である。

## (2) 福祉機器

ガレージに真っ赤なスポーツカーがあった。運転席から出てきたのは杖をついた高齢の男性であった。また、障害者用の車両があり、車中に男性一人の姿があった。外出から帰ってきたらしい。何か手伝いをと気遣ったが、Aは知らぬ顔、数分後、その男性は電動車椅子に乗り、颯爽とガレージから出て行った。ウォーカーの使用も多い。また、いわゆる日本のシニアカーも多く見られた。福祉器具の導入が人々を自立させている。日本では、男性が手押し車を押している姿をあまり見かけないが、日本の道路状況を考慮したウォーカーなどさらなる福祉機器の導入が必要であろう。まず公共の場では、さらに車椅子やウォーカーなどが使用できるスペースの確保が急務である。

## (3) 生活の理念

カバネントショアーズの内部を見学した際、「普通の生活、家庭の雰囲気を大切にしている。」とショアーズの責任者であるアラカキ氏は語る。人物の写真撮影が不可であったのもそのためであろう。

生活を大切にすることとは、過去から切り離すことではなく、これまでの生活の継続でなければならない。慣れ親しんだ環境、家具、衣服などを大切にすることとは、その人の個性を大切にすることである。

自立している人々の場合は言うまでもないが、介護を必要とする人々、認知症の人々も自分たちの慣れ親しんだ、愛用の家具に囲まれ、「ホーム」の中で生活していたことが、印象的であった。部屋の外にも各自の思い思いの飾り物を置き、目を楽しませてくれる。部屋の識別ということも兼ねているのであろう。

特に、認知症の人々の階では場所が認識しやすいように、また、その階全体がホームの雰囲気を出せるように、デコレーションとして廊下に洋服がかけられていた。それぞれの部屋も、思い出の品に囲まれており、自分だけの個性的な空間をつくっていた。私が訪れたことのある日本の施設よりも、自分だけの「ホーム」という雰囲気が強く、認知症であるからこそ、これまでの生活の継続を大切にしようと努めているように感じ

られた。

壁にはそれなりの絵がかかっていた。床にじゅうたんが敷いてあることも一因であるが、無機質ではなく、暖かい雰囲気がある。日本では、日本らしい簡素な中に暖かい雰囲気が出せればと思う。

食事に関しては認知症の人も家庭的な雰囲気の中で取れるように、できるだけ食堂に出てきて一緒に食べるように励ましているとのことである。食堂では布ナプキンの代わりにタオルが置いてあった。食堂も日本の高級レストランのようである。

食堂においても、廊下においても、さまざまな季節感や行事を大切にした掲示物や展示物があった。日本同様、歳時記に従い、行事ごとに様々なデコレーションを活用している。3月17日は聖パトリックステイであったため、ぬいぐるみも緑の服を着るなど、緑一色であった。

共有のスペースには、ミシン、コンピューター、オルガン、ピアノ、テーブル、椅子が有り誰でも利用できる。家族とともにパーティーをする部屋、運動をする部屋、リハビリ室、美容室もある。月に一度歯の手入れもできるようになっている（希望者）。

自立している人々は、自分たちの終の棲家、「ホーム」という思いが強いように感じられた。してもらうのではなく、花を植えたり、技術を生かして、作品を飾る等、自ら環境を美しくする姿が多く見られた。

## 3. 国際理解教育の視点からの課題

### (1) 相互理解のための日本理解教育

コミュニティの住人はキリスト教者である。責任者であるアラカキ氏は、「他の宗教の信者の入居も可能だが、必ずキリスト教に賛同するかと尋ねる。」と語った。Aは敬虔なキリスト教者である。Aに、「日本にはいろいろな場所にいろいろな神様がおられる。」と言うと、怪訝な顔をした。そこから、「例えば、台所には台所の神様がおられる、ものを粗末にするとお怒りになる、米粒を捨てると目が見えなくなる。」などと、子どもの頃言われた話をすると「あなたの神は罰するのか、目の見えない人は罰せられたということか、障害を持つ人は日本では罰せられた人々というのか。」などの話になり、日本では障害者は家の光だという考え方もあるということ、福助の話や七福神の話をするが理解してもらったのは難しかった。日本のアニミズムについて、萬物を畏れ敬う日本の精神について、説明することが大切だと痛感した。当然のことであるが言葉をそのまま英語に訳さないことの重要性を再認識した。

出会った多くの人が日本と関わりがあった。Aの次

男も仕事で来日することがある。何故日本人は～なのかの質問に答えられるように日本の学生は日本について日本語で言語化できる必要がある。日本語で理解できないことは語学ができて説明はできない。国際理解教育として日本について知ることの重要性を筆者は以前より述べているが再認識した思いであった。

尚、AとCは会うたび宗教の話となり見解の相違が浮き彫りになるが良き友人同士である。

## (2) コミュニケーション能力の養成

夕食時に、テーブルで一緒になった人々と会話を楽しみながら、食事をしていた。顔見知りの人というわけではなく、これまで会ったことのない、またこれからも会うことはないだろうと思われる人ともよく話す。例えば、カフェでたまたま合い席になった人や、工事中の労働者などと気さくに話をしている。一日で、これまで話したことのない人と会話する機会が多いであろう。

日本人は知らない人と気安くことばをかわすことを好まない。日本人は旅先で日本人に会っても話をしないとよく指摘される。相手が固定できないうちは、意見を言うことや、主張することは、言うまでもなく、気さくな会話も、不得手である。が、もう少し気さくに話す方が、出会いを楽しめるであろう。

国際化の中、日本人を理解してもらうために、意見をいうことは、もとより、さりげなく会話を楽しむことを心がける必要性を強く感じる。教育の様々な場面において、しっかり相手の話を聞き、自分自身の意見を述べる機会を増やし、コミュニケーション能力を高めることが必要である。さりげない会話は心を柔らかくしてくれる。コミュニティの中で、落胆している人へのさりげない言葉がかけられている場面にも遭遇した。

## (3) 教育現場の芸術・技術教育に関する課題

この体験を通してのみというわけではないが、趣味を持つことの大切さを感じる。絵画、音楽、編み物、木工、園芸、スポーツ、何でも良いが、打ち込むもの、趣味があると豊かである。ところが、現在、教育現場ではコンピューターの導入、受験勉強のため、芸術や技術の時間が減少している。若い頃に様々な創作的な経験をすることは晩年にも生きてくるだろう。

## おわりに

引退者のコミュニティ、カバネントショアーズにおける、Aとの8日間の生活から見える日常生活、人々

の素顔、垣間見える文化や事情を紹介し、示唆しうることを述べた。

出会った人々は、過去と継続した自分のホーム、終の棲家で根をはって生活していた。自立心が強く、個性的であった。病気であっても百歳近い高齢であっても、自分らしい生き方を貫き、他の人に自然体で手を差し伸べる精神性と行動力は特筆に値する。

日本において、親の面倒をみる世代は今の50代位までではないかと思われる。今の50代以上は、親の面倒は看るが、自分のこととなると、子どもに負担はかけたくないと思える人が多い。老後を考え、心細くなる人も多い。筆者が体験した、広い敷地に、多くのさまざまな状況の高齢者のみが生活する引退者のためのコミュニティもさらに日本に導入されるであろう。

高齢者のみの引退者のコミュニティは、ともすれば、閉ざされたものとなる可能性がある。しかし、体験したカバネントショアーズは、閉ざされた環境ではなかった。それは、自立した個性的な人が多いからであろう。自立と個性、そして、これまでの生活の継続という考えに基づいているからだろう。日本で同様のコミュニティを作り、開かれたものにするには、自立、個性、生活の継続が、鍵となるであろう。コミュニティのあり方を問うだけでなく、若い頃から一人一人が自立し個性を大切に作る生き方が問われる。

国の事情は違うが、日本の高齢者施設において、高齢者であるが故に、これまで生きてきた証である個性、自負心(自立心) これまでの生活の継続がなお一層取り入れられることを願ってやまない。

## 資 料

### 1. ディナーのメニュー

3月15日(金)

サラダバー(各自、自由に取る)

七面鳥のスープ

ハム、プリエとりんごのサンドイッチ、あるいは、肉リブ(こってりした味)かを選択

じゃがいも

ピーズの煮物

ほうれん草の炒め物

デザート

3月17日(土)

聖パトリックスデイのため緑の服を着る人、緑のイヤリングをする人、緑の帽子をかぶる人と、何か緑のものを身につける人が多かった。

サラダバー(各自自由に取る)

引退者コミュニティの現状  
アメリカ、ワシントン州マーサーアイランドにおけるカバネントショアーズの人々と生活

Covenant Shores Menu

Monday, March 12, 2007  
Smoked Salmon Chowder  
Swiss Steak Hunter Style  
Breast of Chicken Monterey  
Mashed Potatoes with Gravy  
Sautéed Celery and Mushrooms  
Parmesan Tomato  
French Apple Tarts

Tuesday, March 13, 2007  
Beef Noodle Soup  
Roast Leg of Lamb  
Catch of the Day  
Wild Rice  
Asparagus  
Buttered Corn  
German Chocolate Cake

Wednesday, March 14, 2007  
Crème Nelouska  
Braised Pork Chop with Sauerkraut  
Ist of Chicken Parmesan with Spinach Fett  
Steamed Baby Red Potatoes  
Peas  
Carrots  
Bread Pudding with Rum Cream

On the following Holidays meals will be served from 12pm to 2pm, New Years, Memorial Day, 4th of July, Labor Day, Thanksgiving and Christmas



**Delivery and pickup orders may be called into the Dining Room at 268-3060**  
Place calls before 3:30pm Monday thru Saturday  
Place calls before 11:00am on Sunday

**Lunch served Monday thru Saturday 11:30am to 1:30pm**  
**Dinner Served Monday Thru Saturday 4:30pm to 6:30pm**  
**Sunday 12:00pm to 2:00pm**

Thursday, March 15, 2007  
Turkey Soup  
Grilled Ham, Brie & Apple Sandwich  
Braised Shorribribs  
Lyonnaisse Potatoes  
Glazed Beets  
Spinach Souffle  
Snickerdoodles

Friday, March 16, 2007  
New England Clam Chowder  
Lasagna with Meatsauce and Garlic Bread  
Catch of the Day  
Rice Pilaf  
Italian Green Beans  
Corn  
Chocolate Cream Pie

Saturday, March 17, 2007  
Tomato Soup  
Corned Beef and Cabbage  
Irish Stew  
Steamed Baby Red Potatoes  
Cabbage  
Hubbard Squash  
Crème D'Menthe Mousse

Sunday, March 18, 2007  
Salmon  
Ham Steak with Cheese Omelet  
O'Brien Potatoes  
Glazed Carrots  
Sugar Snap Peas  
Boysenberry Sorbet

メニュー

アイリッシュシチュー（聖パトリックスデイを祝つてだろうと思われる）あるいは燻製の肉とキャベツの煮物かを選択  
赤ジャガイモ  
すりつぶしたスクオーシュ（日本のかぼちゃの味）  
デザート

係りの人がテーブルまで来てメインと飲み物について好みを尋ねる。

スープ、デザートは持ち帰りができる。持ち帰りのデザートに関しては当日のデザートか果物かを選択できる。

夕食は、食堂ではなく家へ持ち帰って食べることができる。

昼食も食べることができるが、毎月の食費に含まれていないので後で支払う。持ち帰ったスープと、何か他のもので簡単に昼食を済ます人が多い。

夕食は日曜日から土曜日までは4時30分から6時30分であるが、日曜日は12時から2時である。

尚、介護の必要な人々、認知症の人はそれぞれの階にある食堂で食事をする。

2. 偲ぶ会の式次第

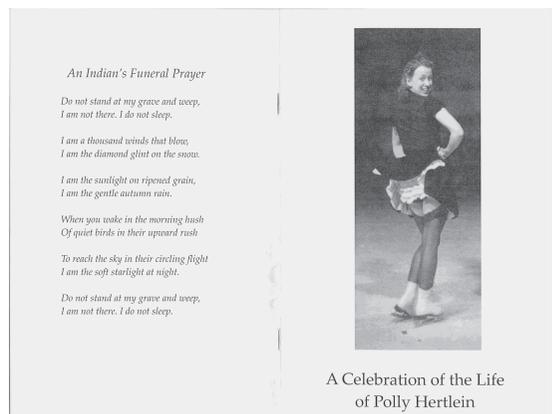
PEOのプレジデントを務めるCは2ヶ月前に母を無くしたばかりであった。母を偲ぶ会の式次第である。表紙には若い頃のスケートを楽しんでいる様子の写真が、内には赤子の時から晩年までの数枚の写真があり、裏には日本で今注目を集めている「千の風」が載っている。

3. さまざまな高齢者

筆者が滞在中、出会った、あるいは、連絡を取った人々である。コミュニティの住人ではないが、高齢者の素顔として付記する。アメリカ人には、引退して生活を楽しもうとする人が多いといわれるが人それぞれである。

Dr. H夫妻 77歳と78歳 マーサーアイランド在住  
夫は現役の歯医者である。週4日7時30分より働く。妻は歯科衛生技師で、夫の医院で週1回働く。大学で講演することもある。夫妻とも日系アメリカ人。

数年前、92歳の妻の母を連れて、日本に旅行する。宿屋の人々が驚いていたと語る。



母を偲ぶ会の式次第

Dr.Ham 夫妻 77歳 妻、年齢不詳 共に再婚 シアトル在住

夫は現役の歯医者である。夫は、一度歯医者をやめ医院を売却、その後船を購入しアラスカで漁師になる。漁師としてハワイでも生活するが、今は、歯医者に復帰。医院を売却したので今は病気の友人の医院で働いている。妻はアラスカ航空勤務であるが、この3月末で退職予定。生涯アラス航空線の航空料金は無料となる。

B夫妻 83歳と74歳 シアトル・アリゾナ在住(近況を筆者と電話で話す。)

夫は元クリーニング店の経営者、妻は、パートで図書館に勤めていたが、夫の引退とともに退職する。引退後、冬の間、雨が多く寒いシアトルを離れ(今年は暖冬)アリゾナに住む。83歳の夫は癌が再発、現在アリゾナで放射線治療を受けている。5月にシアトルに帰る予定。

Hi夫妻 夫80代 妻77 シアトル在住(電話で話す。)

夫は現役の弁護士である。妻は専業主婦。妻は、少し耳が遠い。二人暮らしてあるが、次女が時折、様子を見に来ている。